知っておきたい
世界各国の
産業用ヘンプ

第19回

スペイン
大航海時代から現代へ 変革の波を発信し続ける国

赤星 栄志 あかほし よしゆき

1974年滋賀県生まれ。日本大学農獣医学部卒。同大学院にて産業用ヘンプに関する研究により博士号(環境科学)を取得。99年よりヘンプの可能性と多様性に注目し、日本の大麻草に関する伝統文化復興と麻の研究開発に携わる。現在、日本大学生物資源科学部研究員などに在職。主な著書・編著に『ヘンプ読本』『大麻草解体新書』『大麻という農作物』がある。

大航海時代を支えた農作物

人口4600万人のスペイン。国土面積は日本の約1・3倍で、農地はその53%を占める。大麦や小麦、ブドウ、オリーブなどの生産が盛んな農業国である。近年のヘンプ栽培は低調だが、ヘンプ製品の利用拡大に長年貢献してきた。

ヘンプに関する最も古い記録は、1150年にムーア人（イスラム教徒）が古代都市バレンシア近郊の欧州初の製紙工場でヘンプ紙を作ったこととされている。バレンシア州の町カジョサ・デ・セグラは、1300年代から世界最大のヘンプ・ロープ、網、糸の生産地として栄え、〝ヘンプ都市〟と呼ばれた。

15世紀に入ると、地中海貿易の恩恵を受けられなかった同国は、隣国のポルトガルと競うように、船団を組んでアジアやアフリカ等への航海を繰り広げた。1492年に米大陸に到達したことで有名なコロンブスのサンタマリア号をはじめとする当時の帆船には、帆布とロープにヘンプが使われ、甲板の隙間には船の水密性を保つためにヘンプ繊維が敷き詰められていた。中型の帆船1隻につき、60～80tのヘンプ繊維がロープに使われ、6～8tのヘンプ製帆布を毎年張り替えていたという。種子は乗組員にとってはタンパク質に富んだ食べ物であり、発見した土地に植えることも想定していたのだろう。ヘンプ紙に印刷された聖書を持ち込み、船内のランプはヘンプオイルで灯されるなど、外洋の荒波の力と海水に耐久性をもつヘンプなしでは大航海ができなかったといっても過言ではない（図1）。

図1：コロンブスの帆船「サンタマリア号」

出典：バルセロナ大麻博物館のホームページ

新大陸発見後、北米・中米・南米大陸やアフリカに植民地を拡大していたスペイン王朝は、1777年から1810年にかけて、領土全域でヘンプ栽培に補助金を支給した。チリやメキシコ、カリフォルニアで栽培が促進され、拡大する需要に応えた。ポルトガルのバスコ・ダ・ガマのインド航路開拓や世界一周を成し遂げたマゼラン艦隊の航行にもヘンプ製品は必須だった。

15世紀半ばから17世紀半ばまでの大航海時代、さらにはその後の大西洋貿易やアジア貿易を支えたのは、ヘンプが万能な農作物だったからである。こうした歴史的事実を物語っているのは、カタルーニャ州都のバルセロナにある高さ60mのコロンブスの記念碑だ。よく見ると、エンブレムの上部に2本のヘンプが飾られている（図2）。

図2：2本のヘンプが飾られたコロンブスの記念碑（バルセロナ）

また、2012年には、総面積432㎡、8000点以上の展示規模を誇る大麻博物館がバルセロナ市内にオープンした。運営するのは、オランダのアムステルダムにある世界最大の大麻博物館と同じ経営体で、スペイン国内のヘンプの栄枯盛衰だけでなく、世界各国の歴史を紹介している。ちなみに、日本コーナーにはヘンプの縄や布を使っていた当時の戦国武将の鎧や武士の裃などが並べられている。

栽培・品種の近代化はヘンプ・パルプのおかげ

1900年代になると帆船は蒸気船に移り、60年代以降には化学繊維が普及した。製紙業でも、木材パルプを使って大量生産する技術が確立されると、ヘンプの需要は激減した。劣勢に立たされたヘンプに、大きな需要を生み出したのがセレサ社だった。同社は、バルセロナに拠点を置き、52年に稲わらパルプの製造を手がけて以来、67年にフラックス（亜麻）・パルプ、68年にヘンプ・パルプの製造を開始し、今日までさまざまな非木材繊維パルプの製造に特化してきた。

現在、一般的な印刷用紙は木材パルプから製造されるが、タバコの巻紙やティーバッグ、コーヒーフィルター、電子機器に欠かせないコンデンサ紙、化粧用および医療用の不織布、自動車燃料のろ紙、紙幣などの特殊紙には、フラックスやヘンプ、ジュート麻、マニラ麻などの非木材繊維パルプを原料に用いる。木材パルプに比べて非木材パルプは、繊維が長く、低密度で不透明度が高いという特性をもつため、フィルターや絶縁紙に適しているのだ。なかでもヘンプ・パルプは、着火したときに中身の葉タバコと巻紙とが同時に燃えていくことから、刻みタバコの巻紙として重宝されている（図3）。大手タバコメーカーのフィリップ・モリス社は、ヘンプ・パルプによる特殊紙をいまでも採用している。

欧州共通農業政策にフラックスとヘンプの項目が設定されたのは70年のことである。この補助金制度を利用したスペイン国内でのヘンプ栽培は72年に始まった。当時は国内産に加えてフランスで収穫されたヘンプ繊維もほとんどが同社の紙パルプの用途に使われていた。欧州における栽培、収穫、繊維の分離工程での機械化が進んだのは、同社が年間1000t以上のヘンプ繊維を求めたおかげである。欧州随一のヘンプ栽培国フランスでは、機械化に対応する品種改良も大きく進展した。

スペインでも、国内の作付面積が300～900haで推移した90年代に、欧州各国と同じく産業用ヘンプの法整備が進められた。王国令1729／1999によって、低THC濃度の品種を認定し、栽培免許制、THC検査体制などを整えたのだ。ところが、いくつかの意欲的な農場が新規参入したものの、繊維とオガラを分離する一次加工場の設備投資が過大であることや、認定品種の種子をフランスから購入しなければならない点などを理由に、栽培面積は大きく拡大しなかった。ヘンプ・パルプを生産し続けたスペインは、フランスと同様に世界的な大麻禁止の流れを受けた全面禁止を行なわなかったため、栽培解禁というある種のブームを起こせなかったのかもしれない。

欧州最大の大麻専門の見本市を毎年開催

一方で、スペインが世界的に影響を及ぼしているのが、02年からバルセロナで毎年開催されている「スパナビス（Spannabis）」という欧州最大の大麻専門の見本市だ。衣服や食品、化粧品、建材、農業、品種などの産業用途だけでなく、医療用、嗜好用にも力点を置く。最新のヘンプ、カンナビスの研究成果が発表され、一般消費者向けのマリファナ品評会や、音楽イベントのエンターテイメント性だけでなく企業間のビジネス交流をも推進するという全方位な企画が多くの人に支持されている。

スペインでは実質的に非犯罪化されていた大麻の自家栽培や所持が、15年7月に改正された市民安全保障法でようやく明文化された。その地の利を生かし、ポルトガルと連携して、スペイン語圏への情報発信を重視している。

19年3月には、起業家や投資家のための国際大麻ビジネス会議（ICBC）の第7回会議と共同で開催され、3日間で約300社が出展し、3万人以上の来場者でにぎわった。米国の大麻専門メディア「ハイタイムズ」が買い取りを画策するほど、企画力や集客力に秀でた存在になっている。世界各国の法制度がヘンプ、カンナビス産業の発展の足かせとなっているなかで、変革の波の発信源としての期待は大きい。

図3：セレサ社製のヘンプ・パルプを使ったタバコの巻紙

図4：スパナビス2019と第7回国際大麻ビジネス会議（IHBC）の会場の様子

参考URL：http://www.spannabis.com